

## 地主の末裔たちが優れているゆえん

先月号に、これまで取材してきた本誌読者の多くが地主あるいは自作農の孫ひ孫たちだったと書いた。そして、農業・農村の現在を担う人々の大多数は地主か自作農の末裔だと言っても間違いではないだろうということと、それも時代がいまに近づけば近づくほどその比率は高くなっているように感じるとも触れた。本

当はこの書き出しで千葉県成田市の小泉輝夫さんのことを紹介しようと思っていたのだ。

小泉さんも曾祖父の代には自宅から成田山新勝寺まで所有農地が広がっていたらしい。いまどき、自らの出自を自慢気に語る人などいない。小泉さんもそうだ。友人たちから「石

油王」とあだ名をつけられるほど、水の吹き出す田に暗渠を入れて圃場改良を続ける小泉さんに、その理由を尋ねたときに

彼はこう言った。  
「ジイサンやオヤジから受け継がれてきた田を大事にすることをしつけられてきたからでしょうね」

今年、トウモロコシを作った谷地田は、何度も暗渠工事を繰り返して、幅広のコンバインが入れるようにと

狭い農道を自ら重機で拡張した場所だ。小泉家は小作しているその谷地田を親子二代で改良してきた。今年の大雨でも、上の田はコンバインが入れないほどにぬかるんでいたが、下にある彼の圃場には難なく汎用コンバインが入れた。

小泉さんが今年、水稲を作ったのは約35ha。他にも大豆やトウモロコシなど約50ha。ほとんどは同じような借地の谷地田である。時に、友人たちや弟や奥さんの手助けを頼むが基本的には小泉さん一人の労働力でそれをこなしている。彼が田植えをするのを見たことがあるが、時速5km

をゆうに超す高速作業だった。暗渠を入れ、プラウをかけて時にはレベラーも入れずバーチカルハローをかけ、土を踏みしめただけで田植えをすることもあるという。圃場改良に取り組み、しかも新技術に果敢に採用する彼だからできる技である。

彼の圃場改良に励む姿を見て北海道栗山町の勝部征矢さんのことが思い浮かんだ。勝部さんは自作地で200haを超える大規模麦生産者だが、買った土地を自ら改良し続け、圃場のほんの一部分の排水が悪いと作付けすらしらない。そして、自らの

ことを「土地利用型経営」と呼ばれるのを嫌い、「土地管理型経営」と呼んでほしいと言う。「仮に登記簿には自分の名前が書かれていても、農地とは国民から預かっているものに過ぎない。そして、その農地を使って利益を上げながら最高の農地に管理していくのが農業経営者の仕事だ」と話す。

勝部さんが最高の農地を造成することに汗をかくように、小泉さんは冬中、暗渠作りに精を出す。

昔、茨城県牛久市の高松求さんから「農家は冬に働ける者が勝者なのです。夏に作業に追われるというのは戦場で鉄砲の掃除をしているようなもの」と聞かされたことがある。小泉さんはまさに冬に働く者だ。

本物の農業経営者とは、その土地の持つ可能性に想像力を働かせ、目の先の損得を語る前に農地あるいは土に向かつて汗をかく。農家に生まれのままに生きるのではなく、時代の変化を自覚し、農業経営者として自ら生まれ直す必要があると書いたことがある。しかし、農業経営者が「農業」の経営者であるゆえんはその農地や土への思い入れであり、それこそ地主の末裔たちが親から子へと受け継いできた家訓であり思想なのだと思う。だからこそ彼らは優れた経営を実現できているのだ。

# 江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。